

令和2年～3年度 新潟県・新潟市小学校教育研究会指定研究（2年次）
生活科・総合的な学習の時間授業研究会 活動記録

1 基本情報

- (1) 研究主題：思いや願い，考えを大切に，学びを深める子どもの育成
～「ほんもの体験」と思考をつなぐ，対話的な学習の充実を目指して～
- (2) 教科・領域：生活科・総合的な学習の時間
- (3) 期 日：令和3年10月7日（木）
- (4) 会 場：妙高市立新井北小学校 ※妙高市内参加者は現地公開，他はオンライン公開

2 研究の概要

1年次の研究では，～目的意識，考えの根拠を明らかにすることを重視した授業を目指して～を副題に掲げて校内研究を進めた。そのために，共通の目的や目標をもつこと，話し合いが充実するようなグループ編成や形態を工夫すること，児童の思考を整理する板書の工夫や思考ツールの活用等に重点を置いて，授業研究を行った。

2年次の研究では，昨年度の研究の成果と課題を受け，～「ほんもの体験」と思考をつなぐ，対話的な学習の充実を目指して～を副題に掲げて，研究主題に迫ることにした。

(1) 「ほんもの体験」とは

「ほんもの体験」とは，当校が十年来，生活科・総合的な学習の時間で使ってきた言葉である。価値ある体験活動とするために，教師が大事にしている点は次の通りである。

- 繰り返し対象と関わること
- 活動に十分浸ること
- 観察や実験，見学や調査，インタビュー等に自ら行動すること
- ものづくりや生産活動など，実物や実感を伴うこと
- その道の名人やプロと関わること
- 試行錯誤しながら，追究すること
- 喜びや満足感，達成感を感じる

この「ほんもの体験」が，児童の主体的な学びを生み，気づき，考え，探究する態度や力を育てる。どのように「ほんもの体験」をさせるかは，学級担任の意図はもちろん，地域の人材データの活用が大きい。妙高市の地域人材コーディネーターとの密なる連携が欠かせない。

(2) 「対話的な学習の充実」とは

「対話的な学習」については，広い意味で次のようにとらえている。

- 児童同士の対話・・・ペアやグループの少人数，学級全員，他校の児童
- 教師と児童の対話・・・教師と児童一人，教師と学級全員
- 家族や知り合いとの対話・・・親，兄弟姉妹，祖父母，親戚の人
- 地域の人との対話・・・名人やその道のプロ
- 資料との対話・・・本や写真，ICTの活用等
- 自己内対話・・・思考ツール，ワークシート，作文シートの活用等

3 授業の概要

(1) 1年 生活科の授業について

- ① 授業者：滝澤 泉
- ② 単元名：「ヤギさんともっとなかよくなるう」
- ③ 概要：前時では、これまでの飼育の経験から、ヤギの特徴や気持ちを考え、ヤギのハーフバースデーでやりたいことを考えた。本時では、前時の話し合いを生かしながら、ヤギへのプレゼントについて考える学習活動を行った。事前に考えを書いたワークシートや発見カード、掲示物を参考にしながら、ヤギが喜ぶという視点でプレゼントを考えることができた。

○ 活動の実際

【「ほんもの体験」との関わりや出会いの工夫】

児童が毎日ヤギと関わる時間を確保するために、朝の「おはようコース」、帰りの「さよならコース」を設定したことで、どの児童も繰り返しヤギと関わり、観察し、変化や成長に気付くことができた。本時では、その経験をもとに、プレゼントについて考えることができた。

【思考を広げたり、深めたりするための手立て】

これまでの児童個人の学びや気づきを蓄積するためにファイルを作成し、ヤギと関わったときのことを書き留めてきた。また、クラス全体で共有したいことについては壁面掲示にした。本時では、ファイルや壁面掲示を見返して、これまでの経験を思い出し、ヤギのプレゼントを考える姿が見られた。

ヤギのプレゼントについて、どのグループからもケーキという案が出されたが、それぞれがイメージすることは同じものではなかった。授業者がグループごとに意見を聞き取り、板書し、整理することで、自分たちが贈りたいケーキのイメージを共有することができた。

【指導過程における対話的な学習の充実】

児童の実態として、うまく話せない児童がいるため、話し合いは少人数のグループで行った。少人数での話し合いの経験を積むことにより、本時においても、話し合いが苦手な児童も自分の考えを進んで話す姿が見られた。自分と友達の考えの差異に気づき、比較して、どうすれば意見がまとまるか考える児童の姿も見られた。



(2) 4年1組 総合的な学習の時間の授業について

- ① 授業者：牛木 隆夫
- ② 単元名：「わが家のオリジナル安全マップ」
- ③ 概要：前時までには、水害についての一般的な「逃げる」「備える」について考えてきた。本時では架空の2家族について、家族構成や立地環境などの条件をもとに、何に気を付けて逃げるかについて考える学習活動を行った。グループで話し合ったり、発表した内容について教師と考えたりするを通して、家族構成によって逃げ方が違うことに気づき、自分の家の家族だったらどう逃げるかについて考えることができた。

○ 活動の実際

【「ほんもの体験」と思考をつなぐ】

1995年の関川の洪水や、2019年の矢代川の洪水の被害について現地で地域の方から学んだ。また、居住地によって関川チーム、矢代川チームに分かれて学習を進め、相互に意見交換を行った。そのため、被害やその時の対応、平時の備えについての相違点に気付き、新たな防災の視点をもつことができた。本時のグループでの話し合いでは、建物の2階まで浸水した現場を見たことで、「この家なら、屋根まで水が来るかもしれない。早く避難した方がよい。」などと話す姿が見られた。地域の方の話や現地での経験をもとに話すことができた。



【対話を通して、思考を広げ、深める】

「逃げる」「備える」の2つの言葉が防災のキーワードになる。この言葉について、「何のために」「何から」「誰と」などをもとに全員で考えた。この2つの言葉の意味について全員で定義し、共通理解を図ることで全員が同じ視点で学習を進めることができた。本時では、その定義をもとに、架空の家族の「逃げる」について考えることができた。例えば、「この家族は祖父母と逃げるから、早めに避難しなければならない。」などと話す姿が見られた。



また、洪水を想定し、架空の家族が逃げる過程をシミュレーションしたことで、児童は家族構成や住んでいる家などによってそれぞれ逃げ方が違うことに気付いた。自分の家族が逃げるならどのように逃げるべきかに思いを巡らせた。そして、自分の家族構成を把握し、自分の家族にぴったり合った安全マップを作成した。自分の家族が逃げるならどこを通過して逃げるか、自分の家族が逃げる時の心配なことは何か、自分の家族なら何をどのくらい備えるかなど、実際に家族とも相談しながら、避難経路や備蓄用品をまとめた安全マップを作り上げることができた。

4 研究の成果

(1) 1年 生活科の授業について

① ご指導 【指導者 妙高市教育委員会 指導主事 丸山 文雄 様より】

- ・協働に関わることで、課題を追究、探究できるというのが、ほんもの体験の意義になる。まさに、ヤギの飼育は決して1人ではできない。ほんもの体験として価値のある体験である。
- ・本時では、教師と児童の対話、グループ内での対話を通して、新たな気づきが生まれたり、今までの考えを、よりよい気づきという形で思考を深めたりできた。
- ・対話で大事なものは、話して伝えるより、相手の立場に立ってしっかり聞くこと、聞き合うことがスタート。本時では、友達の考えに拍手する、うなずく、「いいねえ。」と言葉で反応するなど、学級の雰囲気は児童の学びを伸ばしていた。
- ・本時では、4つの「つながり」が見られた。他教科との関連を生かす「学びのつながり」。学校生活、家庭生活、社会生活も含めて、身近な関わりを生かす「日常生活のつながり」。保育園や

幼稚園での経験を生かす「縦のつながり」。ヤギ飼育を通した子ども同士のつながりや、ヤギに関わる様々な人とのつながりを大事にする「人間関係のつながり」。生活科の授業を作る際に大切な視点が盛り込まれていた。

② 成果と課題 (○…成果 △…課題)

○ハーフバースデーでのプレゼントを考えるという学習課題にしたことで、児童がこれまでの生活経験、ヤギの世話の経験をもとに考え、意欲的に活動していた。その中で、これまでの児童の経験や気づきがたくさん発揮されていた。

○話し合いでは、自分だけではうまく説明できない児童に対して、周りの仲間が言葉を補ったり聞き返したりすることで、どの児童も自分の意見を話すことができた。

△児童から出されたいろいろなプレゼンについて、全てプレゼントするのではなく、「ヤギさんが喜ぶことは何か」という視点で考えさせたり、精選させたりすることで、児童の思いや気づきがさらに深まったのではないかと考える。継続して飼育活動を行っていくうえで、それぞれの活動が、誰のためなのか、何のためなのか、目的意識をもたせて取り組むことが大切である。

(2) 4年1組 総合的な学習の時間の授業について

① ご指導 【指導者 上越教育大学教職大学院 教授 松井 千鶴子 様より】

- ・川に入った経験や、防災士の話から、水害についての「逃げる」「備える」の大切さに気づき、自分事として考えることができていた。
- ・授業では、グループの中でも、黒板の前に集めた場面でも、児童同士、教師と児童の対話で学びを深めようとする様子が見られた。
- ・時々、「自分の家族は？」ということ意識させる声かけがあると、ほんもの体験と思考をうまくつなげることができるのではないかと。
- ・我が家のオリジナル安全マップ作りの過程が、「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」につながっていた。我が家のオリジナル安全マップ作り自体が、自分事として考えて作っていく個別最適な学びである。その過程の中で協働的な学習をすることで、他の家庭の安全マップ作りから学ぶことができたり、さらには、クラス全体の防災意識を高めたりすることができる。

② 成果と課題 (○…成果 △…課題)

○これまでの学習を生かして、架空の家族の避難経路や避難の仕方を考えることができた。現地学習で学んだことや体験したことをもとに話し合っていた。これまでの児童の学びを発揮しながら学習を進めることができた。

○家族構成の違う2つの架空の家族を比較することで、児童は家族構成によって避難経路が違うことに気付いていた。幼児や高齢者、ペットが安全に避難するためにはどのように逃げるべきかを具体的に考えることができた。

△本時では、逃げ方について考えることを学習課題とした。しかし、児童は、逃げ方だけでなく、備えるものや避難所に持って行く物についても考えていた。逃げるためには事前に備えておくことも必要である。児童の意識の中でも「逃げる」と「備える」を一緒に考えていた。児童の学びの様子をしっかりと把握することが学習課題の設定につながることを実感した。